

ぱれっとスタッフによる 福祉用語解説

「8050問題」とは80代になった親が50代の子どもの世話をしなければいけないという問題のことです。通常であれば高齢になった親の世話を子どもがするのが一般的ですが、引きこもりやニートなどの理由で逆転している家庭が増えてきているのが原因です。

これを障がいのある人の家庭の特性を背景にして考えてみました。

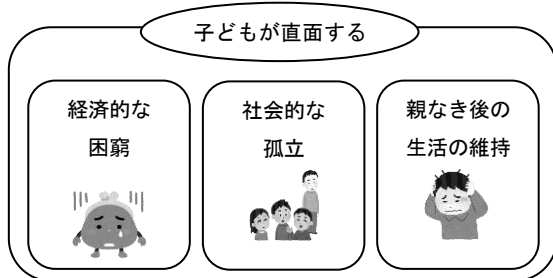
●障がいのある人の「8050問題」

社会資源（グループホームや入所施設など）の不足も背景にあり高齢の親が障がいのある子と同居して世話をしている「老障介護」、障がいのある子が高齢の親の介護をしている「障老介護」の2つのケースがあります。

●相互依存

障がいのある子と親が長く一緒に暮らすと①経済的②介助的③心理的「相互依存」に陥りやすいと分析されています。しかしその反面「障がいのある子がいるから高齢になっても頑張れる」という意見もあります。

8050問題で、障がいのある子は将来的にさまざまな問題が深刻化すると予想されます。



●福祉制度

障がいのある人の65歳問題では、障害福祉サービスから介護保険サービスへの移行が課題に挙げられますが、同一事業所内で両方の事業を行なえる「共生型サービス」の制度も平成30年に始まりました。

ぱれっとの職員による「福祉用語解説」。今回は「8050問題」について障がいのある人の家庭の特性を背景にして解説します。

※共生型サービスとは

介護保険サービス事業所

障害福祉サービス事業所

障害福祉サービスを提供しやすくする

介護保険サービスを提供しやすくする

このことを目的とした指定手続きの特例として設けられました。

それにより、障がいのある人が65歳を迎えても同一事業所を継続利用できたり、利用出来る事業所の選択肢が増えたりします。

その他にも、地域共生社会を推進するきっかけになったり、介護や障害の枠組みにとらわれず多様化・複雑化している福祉ニーズに臨機応変に対応したりすることが期待されます。

●「6030」のうちに

8050は「出来上がりの絵」であり、そうなる前の6030（親が60代、子どもが30代）のうちに本人のライフステージに寄り添う相談員や支援事業所とつながることが「負のスパイラル」に立ち向かう手段だと言われています。親が子の世話をする期間が長くなるほど、いざ障がいのある子がひとりになったとき生活に困難が生まれる可能性があります。支援者と関係性を築いて、親以外にも本人の生活サイクルや嗜好、特性などを理解しておいてもらう必要があります。

●まとめ

親なき後問題は将来必ずやってきます。いざその時が来てから慌てないように、親が元気なうちに早めの対策をとるのがいいと思います。

日常生活や生活資金、財産などをどうするのかを家族で話し合ったり、必要に応じて障害者支援施設の専門的なサポートを受けたりすることもできます。

（おかし屋ぱれっと 山元絵里）